

・ 本学における講義保障体験

1. 案内概要

基本アンケートを含む調査依頼は、11月21日に対象校に郵送した。その際、「同志社大学における講義保障体験(授業体験)の申し出について(ご案内)」を同封し、申し出を呼びかけた。

- (1)実施対象日 12月3日(水)～24日(水)の平日15日間
- (2)実施講時 1講時～4講時
- (3)対象科目 進学希望学部 of 1,2年次配当の基礎・教養科目(相談のうえ決定)
- (4)講義保障手段 PC通訳、ノートテイク、手話通訳
- (5)参加対象者 聴覚障害のある生徒(学年は問わない)、その父母または進路指導教員
- (6)実施予定数 先着20組

2. 申し出状況

- (1)申し出件数 7組

本学における講義保障体験は、当初申し出のあった先着20組への対応を予定していたが、結果として7組からの申し出にとどまった。これは、委託事業の契約開始時期との関係から、調査対象校への依頼から講義保障体験開始までの期間が短かった、大学学年暦との関係から実施対象期間を十分に設定できなかった、加えて、高校側の学事日程(試験期間等)との折り合いが必ずしもよくなかった等に起因している。基本アンケート Q14(講義保障体験の関心の有無)をみると、調査回答校中47校(38.2%)より「関心がある」との回答が寄せられており、同様の試みを行う際は、上記の原因をクリアすれば応分の申し出が期待できよう。

(2) 申し出内訳

高校種別 (受付順)	生徒本人 (名)	進路指導等 教員(名)	父母 (名)	計
一般高校	1(3年)		1	2
一般高校	1(1年)		1	2
特別支援学校(聾学校)	7(1年1,2年4, 3年2)	3		10
一般高校	1(1年)	1	1	3
一般高校	1(2年)		1	2
一般高校(法人内高校)		1		1
一般高校	1(1年)	1	1	3
計	12	6	5	23

参加生徒 12 名中、1 年 4 名(33.3%)、2 年 5 名(41.7%)、3 年 3 名(25%)であった。実施時期も遅く、また参加人数が少数であるので断定できないが、一般的なオープンキャンパス(夏期)に参加する生徒の学年構成(3 年が 7 割超)とは大きく異なる。これは、健常生徒の進学以上に、希望する大学の受入態勢などについて知ておきたいという生徒、進路等指導教員、父母の意向が反映されたものと理解できる。

(3) 講義保障体験生徒の障害の程度等級

身体障害者手帳の等級	聴こえの程度	人数
2 級	両耳の聴力レベルがそれぞれ 100 デシベル以上のもの (両耳全ろう)	10 名
3 級	両耳の聴力レベルが 90 デシベル以上のもの (耳介に接しなければ大声語を理解し得ないもの)	1 名
6 級	両耳の聴力レベルが 70 デシベル以上のもの(40 センチメートル以上の距離で発声された会話語を理解し得ないもの) 1側耳の聴力レベルが 90 デシベル以上、他側耳の聴力レベルが 50 デシベル以上のもの	1 名

(4) 講義保障の方法

7 組とも PC 通訳

(障害生徒の意志を基本として、PC 通訳、ノートテイク、手話通訳から選択してもらった結果、全組とも PC 通訳となった)

講義保障の手段は結果としてすべて PC 通訳となった。これは、講義保障体験を受ける当該の障がい生徒が、選択肢として示されたノートテイク、手話通訳(但し、手話を解する者のみ)を、すでに理解または経験済みで、未経験の手段としての PC 通訳を希望した結果といえよう。

3. 申し出者が陪席した講義 [()内は開設提供学部]

- 健康科学論入門(スポーツ健康科学部)
- 科学史・科学論(理工学部〔全学共通教養教育科目〕)
- 哲学(文学部〔全学共通教養教育科目〕)
- 経営学(商学部)
- 環境の科学(理工学部〔全学共通教養教育科目〕)
- 公衆衛生学(スポーツ健康科学部)
- 情報と社会(理工学部〔全学共通教養教育科目〕)

4. 講義保障体験を受けて

4 - 1 「生徒」からのヒアリング

(1) 講義保障を受けての率直な感想

- ・ 講義の内容がほとんど理解できました。
- ・ 所々ききとりにくいところがある時に、パソコンを見ると内容がしっかり理解できた。
- ・ 授業時間90分は長かったが、PC通訳のおかげで内容(難しかったけど)がわかって良かった。
- ・ 一番驚いたのは、文字を見て追いつけないことがあったこと。
- ・ PC通訳の方が、ノートテイクより素早く書けるので良いと思うのですが、早すぎて読み取れない場合があった。
- ・ とにかくはやいなぁと思った。初めてパソコンを使った通訳を経験したけれど、とても見やすく良かった。でも、前の内容をもう一度見るができないという点では、ノートテイクより不便だなぁと思った。
- ・ 初めてパソコン通訳を受けましたが、先生の雑談も表示され感動しました。ですが、ノートに記入している時は画面を見られないので、顔をあげたらまだ書いてない所が上にどんどんスクロールされていてあせりました。
- ・ パソコン通訳の人の打つスピードが、予想以上にすごく早くて驚きました。
- ・ 今回はパソコン通訳を受けましたが、ノートに書き取る時、書き取りたい内容がほとんど取れずに困った。
- ・ 初めてパソコン通訳を体験しましたが、なかなかわかりやすかった。
- ・ PC通訳はとてもわかりやすかったですが、今後授業を受ける時に不安があります。(先生の口とPCと資料の三つを見るとズレが生じる)

(2) 教員の話す情報量についての感想

- ・ とても多く感じられました。
- ・ 教員の意見がとり込まれていて良かった。
- ・ 僕にとっては多く感じた。さすが大学と感じた。
- ・ 1時間半の中でパソコンからの情報量を見ると、ものすごく長くて、読むのに内容がつかめなかった。
- ・ あれだけ難しい話を、90分間きれいにまとめて話す教員にびっくりしました。
- ・ 高校とは比べ物にならないくらい多くて圧倒された。ずっとしゃべりっぱなしには驚いた。
- ・ 怒涛の勢いでびっくりしました。パソコン通訳を受けていてさえこう思うのだから、昔十分な保障がなされていなかった頃の先輩達は、どれだけ大変だったんだろうかと思いました。
- ・ ほとんどパソコンに入力されているなぁと思いました。
- ・ かなり多くの情報量があったので、正直(心の中で)びっくりしました。
- ・ とてもすごいと感じた。
- ・ とても多いと感じました。

(3) 大学の授業を受講した感想(高校での配慮の違いなど)

- ・ 教員が、生徒と対等な関係を持てるような感じで話してくれた。
- ・ 先生の話すスピードが早く、専門的な言葉を多用してくるので、やっぱり大学はレベルが高いなぁと思った。
- ・ 高校の時とは違って1時間半なので長く感じた。それに、先生の言葉が止まらず、喋り続けてい

るのがすごいと実感いたしました。

- ・普段は、手話のついた授業を受講しているので、違いがはっきりわかりました。高校と違って深いなと思いました。
- ・ひたすら喋り続けている事にびっくりしました。また、黒板に書いて説明するより、喋って説明する時の方が多かったので、大変でした。
- ・授業時間が長かった（今の倍近く）ので、先生の講義が全く頭に入らないこともありました。
- ・高校では、プリントに書くというようなものなので、ノートにまとめたりするのは大変かなと感じた。
- ・高校では、大事な事は黒板に書かれてましたが、大学では、自分で調べ、先生の口を良く見ないと分からないなと感じました。

(4) 通訳スタッフがそばにつくことに対する感想

- ・少し慣れない気がした。
- ・安心感がある。
- ・頼りになる存在と考えていますが、1時間半の中で続けていくのは気の毒な感じがしました。
- ・心強かったです。通訳スタッフは、授業の合間をとってやってくれているので感謝しました。
- ・安心感があり、よかった。
- ・講義内容がとても良く分かり嬉しいですが、情報保障が国としての制度になっていないので、「わざわざやってもらっている」と感じてしまい、迷惑をかけているような気持ちになりました。
- ・安心感を得られました。
- ・授業に大体ついていけるかな、と感じました。
- ・1人で授業を受けるより安心できた。
- ・初めてなので緊張しました。そばにいてもらってよかった（不安はなかった）。

(5) 大学入学後の講義保障の希望有無（またその理由）

- ・希望したいです。授業をより理解できるようにしたいからです。
- ・分野によると思う。
- ・希望したい。勉強の内容を知りたいからです。
- ・希望したいです。私は聴覚障がい者ですので、先生の言葉が分からないので、私の耳の代わりとしてほしいです。
- ・今回みたいなスピードで進んでいくと全くわかりません。保障をつけてくれたら幸いです。
- ・私は、保障がないとほとんどわからないので、もちろん希望します。
- ・私の場合、保障を受けられないと全く講義内容がわからず、大学に通う意味がありません。なので、保障を希望するというよりも、保障の充実した大学を希望します。
- ・希望したいな、と思います。つけないよりはつけた方がより分かると思うからです。
- ・希望したいです。授業の時に先生の講義の中に大事な所があるかもしれないので。
- ・通訳する人が大変かなとも思い、まだわからない。
- ・はい。授業をわかりやすく受けたいからです。

(6) 在学での支援の現状(重複回答可)

1. 授業ノートの提供 2名
2. 教員が授業内容の資料を工夫 5名
3. 要約筆記等補助者の配置 0名
4. 手話通訳 4名
5. ビデオは字幕付のものを使用 5名
6. その他(下記)
 - ・PCで話したことがそのまま文字化される「ドラゴンスピーチ」というソフトを使用している。
 - ・英語のリスニングテストは別室で受けている。
 - ・PC通訳(講演、式)一番前の座席に座る、授業内容のプリントを見せてもらう、など。
 - ・先生自身が手話を使っている。

(7) 講義保障体験後における、大学で講義を受ける不安の解消度

1. **すごく解消された** 4名

〔理由〕

- ・講義の内容がほとんど理解できたからです。
- ・サポート(PC通訳)のおかげで、先生がおっしゃってる内容が理解できた。勉強内容はやはり難しいが、不安は解消できた。
- ・情報保障をつけてもらって分かったからよかった。
- ・PC通訳がどのようなものかあまりよく分からなかったですが、この体験を通じて分かりました。情報量が多く(雑談の通訳もあった)教室の雰囲気も伝わりよかった。解消された。

2. **まあまあ** 7名

〔理由〕

- ・所々ききとりにくかった、という不安がまだ少しある。
- ・パソコンを見ながら、たくさんの情報量を得ることができ安心したが、内容が読み取れないことがあり、書きたい分が無くなったりするのが不安。
- ・講義保障の体験を受けて、自分が思ってた以上にほとんどの内容がパソコンに書かれていた。
- ・パソコン通訳では、講義内容が全て保障され、内容をつかむことができた。でも、まだ慣れていないので、全て理解するのに時間がかかった。
- ・パソコン通訳は、今までで最高の情報保障だと思いました。健聴の人の世界を疑似体験できた気分です。こういう保障が全ての大学にあればどんなにか良いのに、と思いました。
- ・授業の内容に関しては、知らない分野だったので少し不安でした。通訳に関しては、前に書いたように、時々追いつけなくなる事があったので、少し不満がありました。
- ・障がい者への対策がなかなか考えられていた。わからない事があっても対応してくれるかどうか・・・という不安がかなり解消された。

3. **あまり** 0名

4. **全く解消されなかった** 0名

(8) 今回の講義保障体験等を通じた大学への進学意欲の向上

1. とても向上した 3名

〔理由〕

- ・情報保障がつく授業ならなんとかなるかなあと思いました。

2. まあまあ 7名

〔理由〕

- ・他の大学と比べて講義がとても受けやすく感じられましたが、通学環境についての悩みがあります。
- ・大学生と同じように授業を体験でき、まるで普通に大学の授業を受けているみたいであったから。
- ・PC通訳などの支援があって、とてもいい大学だと実感したが、やっぱりレベルの高い大学でやっていくのは、それなりの努力を必要とするし、今は高1なのでもう少し考えてみたいです。
- ・私が進学する大学は、ノートテイクできる友達を探さないといけないので、見つからないと授業についていけない。
- ・大学の授業というのはこんなに難しく早いのか、と改めて思い知らされましたが、最初から進学すると決めていたので、特に変化はありません。
- ・こういった体験で、不安などが少し解消できてよかった。同志社大学は、情報保障がととのっているというのはわかりましたが、他大学では、まだまだ進んでない所もたくさんあり、進学後に対してまだまだ不安がある。
- ・学力があるものなら、同志社大に入りたいです。が、情報保障の充実している大学はまだまだ少なく、同志社大は特例という考え方をせざるをえない。

3. あまり 1名

〔理由〕

- ・自分の進路は、専門学校を前提としているので。

4. 全く向上しなかった 0名

< 生徒からのヒアリングを通じて >

実際に大学での講義とその情報保障の実際を PC 通訳を通じて体験してもらったわけだが、まず、「授業時間の長さ」、「授業内容のレベル」、「話される量の多さ」などから、なかなか集中や理解が伴わなかったことに対する戸惑いが見て取れる。また、「テイクの速さに目がついていけない」、「PC 画面や資料に集中しつつノートを取ることの困難性」も示されている。これらは、本学の制度利用学生でさえ苦心している事柄であり、慣れによって徐々に解消していくことも求められよう。

一方、「実際に大学教育の場に足を運んで得たもの」は少なからざるものであったことがうかがえる。それは、「通訳される情報量の多さ」や「教員の雑談を含め、教室の空気を感じ取れたこと」への驚きを経て、講義保障への要望につながっている。

ヒアリング結果からも、今回の体験を通してすべての不安が解消されたとは言いがたいが、「健聴の人の世界を疑似体験できた気分」との感想は象徴的である。今回の体験等(希望者にはキャンパスツアーも実施)を通した大学への進学意欲の向上に関する問いに対して、11

名中 10 名から「とても向上した」、「まあまあ」の回答を得たことは、今回の機会が大学進学へのモチベーションを形作るうえでのかっけとなったことがうかがえる。

4 - 2 「進路指導等教員」からのヒアリング

(1) 講義保障を受けての率直な感想

- ・ボランティアの学生は大変だが、障がい生にとっては授業を理解しやすい。
- ・PC通訳を受けましたが、ほとんどすべての言葉をひらっていただくことができるので、学生はたいへん助かるだろうと感じた。
- ・サポーターの方々の技術力の高さに驚きました。
- ・ノートに手書きしたものは、やはり情報量が少ないと感じた。パソコンは、今回は2人の息が合っていたので、スムーズに行っていたように感じた。だが、2人の相性によって情報量は左右されれると思った。

(2) 教員の話す情報量についての感想

- ・かなり早口だったので、ボランティア学生も障がい生も大変。
- ・(大学としては)特に多いとは思いません。
- ・ほぼ100%保障されている気がしました。
- ・普段何も感じないスピードがとても早く感じた。情報量も目だけで得るには膨大な量の様な気がした。

(3) 大学の授業を受講した感想(高校での配慮の違いなど)

- ・PC通訳・手話通訳など高校では組織的にはできない。(高校では)音声を日本語に直すソフトを使っていたが、誤変換が多いので、今ではほとんど使っていない。板書を多くする、口唇術などで配慮している。
- ・今回、大きな教室だったので、先生と学生の距離を感じた。
- ・講義保障については、中高も検討していかないといけないと思った。ただ、大学と同じような形では、通訳スタッフにも授業があり不可能だと思うので、別の方法を考えていきたい。

(4) 通訳スタッフがそばにつくことに対する感想

- ・問題には感じない。
- ・心強いことであるが、反面、慣れるまでは、緊張や気を抜けないこともあり、普段からのお互いの意思疎通が大切だと感じた。
- ・大変ありがたいと思う。
- ・全く知らない人にはさまれる形になるので、最初は違和感がある。慣れてくるとそんなには気に

ならない。

(5) 大学入学後の講義保障の希望有無(またその理由)

- ・講義保障なしでの大教室の講義は難しいので、当然希望することになるでしょう。
- ・聴覚に障害を持つ学生に対し、これだけ保障していただけると有難い。またこの「100%保障」が最低限のラインになってほしい。
- ・パソコンから得られる情報はとても貴重なので、難聴の学生には有難いと思う。

(6) 講義保障体験後における、大学で講義を受ける不安の解消度

1. **すごく解消された** 1名

〔理由〕

- ・高校よりも確実に内容を伝えられていると思います。

2. **まあまあ** 2名

〔理由〕

- ・かなり解消されたと思います。講義の形式は様々ですから、本人の対応が追いつくのか、心配は尽きないでしょう。
- ・授業の保障面は実際に受けることができ、良かった。もう少し具体的な学生生活についても知りたいと思った。

3. **あまり** 0名

4. **全く解消されなかった** 0名

(7) その他の質問や意見

- ・今回の講義保障体験を通して、大学への進学意欲が向上したであろうことを期待しています。講義保障だけでなく、大学そのものの理解が深まり、進学意欲が高まったであろうことも期待しています。
- ・受験時にはどのような配慮がありますか？
- ・今回は貴重な体験をさせて頂き有難うございました。本校も大学のレベルまでは厳しいと思いますが、対策を考えていきたいと思っています。
- ・この体験を受けることは難聴生徒にとってはとても有意義だと思う。しかし、4月等でパートナー2人の息が合わない時や、相性が合わない時は大変だと思う。体験した生徒の不安解消の程度は、ボランティア生徒の相性によってとても左右される。

< 進路指導等教員からのヒアリングを通じて >

今回の本学訪問を通じて、ヒアリングからも中等教育における講義保障について考えていただく機会となったことが明らかであり、予期せぬ成果であったことが評価できよう。

< 今回の実践を通じて >

今回の基本アンケートの実施と講義保障体験の試みは、本学への進学実績を有する学校を主たる対象とし、かつ後者においては本学への受験を一定考えている生徒を想定するなど、制限的な枠組みの中での調査であった。従って、そのサンプル数は必ずしも多くなく、今回の結果をもって一般的傾向として断じることができない諸点も多い。

しかし、これまで後期中等教育を主たる対象としたこの種の調査は見かけないことから、その回答やヒアリングの結果から大学が学ぶ点が多い。とりわけ、今回のような試みが障がい学生支援をめぐる高大連携の最初の「接点」として果たした意義は大きい。「百聞は一見にしかず」。今後、この接点の継続的な積み重ねが、線から面へと広がりを見せるためには、まず大学サイドがその敷居を低くしていく努力と仕組みを構築することが求められる。